

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530803

研究課題名（和文） メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性の評価

研究課題名（英文） Evaluation of the accuracy of memory monitoring and the effectiveness of Memory Control from the standpoint of metamemory

研究代表者

清水 寛之（SHIMIZU HIROYUKI）

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：30202112

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、実験室場面および日常生活場面において個人が自らの記憶能力や記憶特性、知識状態をどのようにとらえ、能動的な記憶活動の展開にいかにかかっているのかを実証的に明らかにすることである。一般大学生122名に対して個別的に、記憶実験と質問紙調査と記憶検査を実施し、記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性に関する実験室データと日常記憶データの両方を収集した。これらのデータを総合してメタ記憶に関する理論的検討を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to empirically examine how people monitor their own memory ability, memory characteristics and knowledge states, and how they make use of the outcomes of such memory monitoring to actively and effectively control memory activities in the situation of both laboratory settings and everyday life. Each of One-hundred and twenty-two university students individually provided the data of laboratory-based memory and everyday memory through the memory experiments, the survey with questionnaire, and the memory tests. Based on these data, metamemory is theoretically and comprehensively discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：認知心理学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：実験系心理学、記憶、メタ記憶、記憶モニタリング、記憶コントロール

1. 研究開始当初の背景

人間は、一生涯を通じてさまざまな状況のもとで多くの事柄を自己の記憶システムに取り込み、必要に応じてそれらを取り出し利用している。その際、自らの期待や予想の通りに記憶活動が実行され有効に機能することもあれば、自己の記憶活動による結果が期

待や予想とはかけはなれたものになることもある。例えば、日常生活における「思い出せない」、「覚えきれない」、「頭から離れない」といった個人の意識や印象は、後者の顕著な具体例であると言えよう。人間はこうした経験を積み重ねながら、日常的に自らの記憶活動に対してコントロールとモニタリングを

行っていると考えられる (清水, 2009)。

近年の認知心理学は、人間の「知」の営みに焦点を当て、認知過程全般を一連の情報処理過程と捉えることで多大な研究成果をもたらしてきた (Klaczky, 1980 など)。それらを通して、人間の記憶に関して、(1)個人は自動的・無意図的な記憶過程に支えられながら多種多様な能動的・意図的な記憶活動を展開・実行し得ること、(2)意図的な記憶活動の基礎的過程として、記憶に関する認識や知識 (メタ記憶) の働きが重要であることが明らかにされてきた (Nelson & Narens, 1990)。メタ記憶には、将来の想起の必要性を自覚することをはじめ、課題場面や刺激材料の性質に応じて適切に記憶活動を制御・調整すること (記憶コントロール)、自己の記憶活動・記憶状態を監視・点検すること (記憶モニタリング) などが含まれる。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの実験的記憶研究の成果に立脚して、記憶モニタリングとして個人が実験室場面及び日常生活場面において自己の記憶コントロールをどのようにとらえているかを実証的に明らかにし、日常場面での記憶活動の自己評価と実験室場面での記憶活動の自己評価との共通点と相違点に焦点をあてて検討することを目的とする。

本研究では、一般成人 (大学生) を対象に、同一の個人から記憶に関する実験、質問紙調査、及び検査を実施し、記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性に関する基準的なデータを収集する。それらのデータをもとに、個々の指標の度数分布及び指標間の関係を捉え、個人のメタ記憶能力を評価するための基準や枠組みを得る。

本研究において、実験室場面のなかでは認知心理学における伝統的な記憶実験課題である自由再生課題が用いられる。その際、実際の再生成績と実験参加者による再生予測との一致・不一致の程度が実験室場面での記憶モニタリングの正確度として測定される。具体的には、実験参加者に対して一定の速度で刺激項目を継時的に視覚呈示し、呈示終了の直後に呈示順序に関係なく再生することが求められる。そして、直後再生のあとに、後続の再生テストでの再生成績の予測も求める。そのような実験試行が別の記銘項目リストに対して複数回行われたあとに、呈示されたすべての記銘項目に対する最終自由再生が求められる。この実験課題を通して、直後再生成績、最終再生成績、最終再生成績予測、という3つの指標が得られるが、このうち最終再生成績と最終再生成績予測との差をもって実験室場面での記憶モニタリングの正確度の指標とする。

そのあと、実験参加者がどのように自由再

生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙が与えられる。この質問紙には、10の下位リハーサル方略 (単一反復、多重反復など) が記載されており、実験参加者が自由再生課題において刺激項目を実際にどのように記銘しようとしたかについて、それぞれの下位リハーサル方略の主観的な使用頻度に関する評価が求められる。これらの下位リハーサル方略に関する主観的頻度評価をもって実験室場面での記憶コントロールの効果が検討される。

次に、日常生活場面での自己の記憶行動を捉えるために、4種類のメタ記憶質問紙が用いられる。メタ記憶質問紙は、個人の記憶信念及び自らの記憶行動に関する主観的評価や回想的判断を調べるものである。その4種類とは、(a)日常記憶質問紙 (EMQ)、(b)認知的失敗質問紙 (CFQ)、(c)記憶能力質問紙 (MAQ)、(d)成人メタ記憶尺度 (MIA) である。これらに加えて、とくに(e)「のどまで出かかっているのに出てこない現象 (TOT 現象)」に焦点を当てた TOT 質問紙 (TOTQ) が準備される。さらに、記憶を含む、より広範な個人の時間的展望 (個人の心理的過去及び心理的未来についての見解) を調べる質問紙として、(f)ジンバルド一時間的展望質問紙 (ZTPI) が用いられる。

最後に、個人の記憶能力を特徴づけるために、個別式の記憶検査である改訂版ウェクスラー記憶検査 (WMS-R) を実施する。この検査は、13の下位検査 (「1. 情報と見当識」、「2. 精神統制」、「3. 図形の記憶」、「4. 論理的記憶 I」、「5. 視覚性対連合 I」、「6. 言語性対連合 I」、「7. 視覚性再生 I」、「8. 数唱」、「9. 視覚性記憶範囲」、「10. 論理的記憶 II」、「11. 視覚性対連合 II」、「12. 言語性対連合 II」、「13. 視覚性再生 II」) の得点に基づいて五つの指標 (①一般的記憶、②言語性記憶、③視覚性記憶、④注意/集中力、⑤遅延再生) が算出されるが、そのうち⑤遅延再生については、実験室場面での最終再生予測と同様に、この下位検査成績の予測が求められる。

3. 研究の方法

(1)実験参加者 近畿地方の1私立大学に在籍する学生122名が本実験に参加した (男性58名、女性64名; 平均年齢20.3歳、標準偏差1.22、範囲18-26歳)。

(2)実験装置 実験室場面での刺激項目の呈示にはDell製PC、Optiplex780が用いられ、刺激項目の呈示に関する制御にはCedrus製ソフトウェアSuperLab4.0が用いられた。実験参加者への刺激呈示については、実験者の操作するPCのディスプレイとは別に、刺激呈示専用のNEC製24インチ液晶カラーディスプレイLCD-EA241WMが用いられた。

(3)刺激材料 実験に用いられた刺激材料は、小川(1972)及び秋田(1980)によるカテゴリー別出現頻度に関する基準表から、高頻度の単語を50個抽出し、1リスト10項目からなる項目リストを5リスト作成した。記銘項目は1リスト内でできるだけ意味的にも音韻的にも無関連になるように配列された。

(4)質問紙の構成 実験室場面において実験参加者がどのように自由再生課題に取り組んだのかを調べるために、下位リハーサル方略質問紙が用いられた。この質問紙には、次の10の下位リハーサル方略が記載されていた。①単一反復(単語を一つずつ単純に何度も繰り返す)、②多重反復(単語を数個ずつまとめて何度も繰り返す)、③イメージ化(各単語のイメージを思い浮かべる)、④リスト内連想(リスト内で単語同士を結びつける)、⑤リスト外連想(あるリストの単語を別のリストの単語と結びつける)、⑥単一項目による文章化(各単語について文章を作る)、⑦複数項目による文章化(単語をいくつかまとめて文章を作る)、⑧物語化(リストの単語を全部使って物語を作る)、⑨カテゴリー化(同一カテゴリーに属する単語をまとめる)、⑩類似による群化(同一の文字や音韻を含む単語をまとめる)。これらの下位リハーサル方略のそれぞれについて、「まったくしなかった」から「つねにしていた」までの5段階で評定することが求められた。

日常生活場面における記憶行動や記憶信念、時間的展望を調べるためのメタ記憶質問紙及び時間的展望質問紙として、EMQ、CFQ、MAQ、MIA、TOTQ、ZTPI、の6種類の質問紙が用いられた。いずれの質問紙も、日本人を対象に行われた先行研究によって質問項目の因子構造が明らかにされている(清水・清水・高橋・齊藤, 2006, 2007; 金城・井出・石原, 2013; 下島・佐藤・越智, 2012)。EMQについては、日常生活場面での特定の記憶行動や記憶現象を表す記述文(全28項目)に対して、その出現頻度を「最近6ヶ月で1回もない」から「日に1回以上」までの9段階で評定することが求められた。CFQについては、日常生活場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部(全25項目)に対して、その出現頻度を過去6ヶ月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの5段階で評定することが求められた。MAQについては、日常記憶行動に関連した特定の個人的傾向や特徴を表す記述文(全31項目)に対して「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階で自己の適合度を評定することが求められた。MIAについては、自己あるいは一般人(一般的な他者)における特定の記憶行動や記憶信念を表す記述文(全44項目)に対して「まったくそのとおりだと思う」(または、「まったくしな

い)から「まったくそうは思わない」(または「いつもする」)までの5段階で、それぞれ適合度(または出現頻度)を評定することが求められた。TOTQは、①TOT生起時の感情性、②目標語の検索成功性、③TOT生起時の目標語の部分的アクセス可能性(最初の文字、音韻数、音の響き)、④妨害語の忘却困難性、⑤目標語の検索努力、⑥目標語検索への固執、⑦目標語の検索断念、⑧TOTの解決手段(他者に尋ねる、辞書や書物などで調べる)、⑨TOTの偶発的解消、⑩TOTの日常的解決手段、⑪最近のTOTの発生状況(時期、目標語、生起時の他者存在、対処行動)について尋ねられた。このうち、①TOT生起時の感情性については、「非常に不快である」から「非常に快い」までの7段階で評定することが求められた。②目標語の検索成功性、③TOT生起時の目標語の部分的アクセス可能性、④妨害語の忘却困難性、⑧TOTの解決手段、及び⑨TOTの偶発的解消については、「まったくない」から「非常によくある」までの5段階で経験頻度を評定することが求められた。⑤目標語の検索努力については、「全く努力しない」から「非常に努力する」までの7段階で評定することが求められた。⑥目標語検索への固執については、「全く気にならない」から「非常に気になる」までの7段階で評定することが求められた。⑦目標語の検索断念については、「すぐにあきらめる」から「10分以上考えたあとあきらめる」までの5段階で評定することが求められた。⑩TOTの日常的解決手段と⑪最近のTOTの発生状況は、自由記述形式による回答が求められた。ZTPIについては、個人の時間的展望に関する記述文(全56項目)に対して「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で評定することが求められた。

(5)記憶検査 個人の記憶能力を調べるためWMS-Rが用いられた。この検査は13の下位検査から構成されているが、このうち「情報と見当識」については、実験参加者が健常大学生であり、あとの指標得点の算出には用いられないことから、質問の一部(「今日は何曜日ですか?」など)の実施が割愛された。

(6)全般的手続き 実験・調査・検査は、同一の実験参加者に対して個別的に連続して行われた。どの実験参加者に対しても、実験→調査→検査の順に行われた。

(7)実験手続き 実験は参加者ごとに個別的に行われた。参加者はコンピュータ画面に同時に呈示される10個の単語を確実に記銘することが求められた。次に、その10個の単語の呈示終了直後に自由再生が求められることが教示された。このような試行が全部で5回行われ、全5試行終了後に別の簡単な作業を行ったあとに、呈示されたすべての単語の再生テストがあると教示された。さらに、

それぞれの再生試行の終了後に、呈示された10個の単語のうち何個くらいを最後にもう一度思い出せるかの予測が求められた。記銘項目リストの呈示速度は1項目につき3秒であった。各項目リストの呈示終了後、1分間の直後自由再生テストが行われた。そのあとに、最終再生テストに関する再生成績の予測が行われた。「記銘項目リストの呈示→直後再生テスト→最終再生成績の予測」という手続きが5試行行われ、試行間間隔は約1分であった。最終試行において呈示されたリスト項目に対する最終再生成績の予測がなされたあとに、妨害作業である3桁数字の逆算課題が30秒間行われた。その後、呈示された全リスト項目についての最終再生テストが3分間にわたって行われた。実験に要する時間は15分程度であった。最終自由再生テストの終了後に、実験参加者に対して下位リハーサル方略に関する質問紙が与えられ、自己ペースで回答することが求められた。実験に要する時間は15分程度であった。

(8)調査手続き 質問紙調査は実験に引き続いて参加者ごとに個別に行われた。EMQ、CFQ、MAQ、MIA、TOTQ、ZTPIの6種類の質問紙が与えられ、自己ペースで回答することが求められた。質問紙調査に要する時間は30分程度であった。

(9)検査手続き 質問紙調査の終了後、個別にWMS-Rが実施された。ただし、「4. 論理的記憶I」、「5. 視覚性対連合I」、「6. 言語性対連合I」、「7. 視覚性再生I」については、後続のそれぞれの遅延課題において完全正答を100パーセントとした場合に、およそ何パーセントくらいの成績をあげることができるかの予測が求められた。記憶検査に要する時間は、およそ45分程度であった。

(10)評定反応の得点化と分析方法 本研究における実験・調査・検査におけるすべてのデータは、表計算ソフトウェア Microsoft Office Excel 2007によって集計・整理され、統計的分析は統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 19によって行われた。記憶実験については、従来の分析方法に合わせて、自由再生課題における直後再生テスト及び最終再生テストの成績を算出した。それに加えて、最終再生成績の予測についても同様の集計・整理を行った。下位リハーサル方略質問紙については、「まったくしなかった」から「つねにしていた」までの5段階の評定反応に対して、順に0~4の得点が与えられた。

質問紙調査で得られた回答に対して以下の得点化が行われた。EMQについては、「最近6ヶ月で1回もない」から「日に1回以上」までの9段階で評定反応に対して、順に1~9の得点が与えられた。CFQについては、「まったくしない」から「非常によくある」までの5段階の評定反応に対して、順に0~4の得点

が与えられた。MAQについては、日常記憶行動に関連した特定の個人的傾向や特徴を表す記述文(全31項目)に対して「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階の評定反応に対して、順に1~5の得点が与えられた。MIAについては、「まったくそのとおりでと思う」から「まったくそうは思わない」の5段階の評定反応、あるいは「まったくしない」から「いつもする」までの5段階の評定反応に対して、順に1~5の得点が与えられた。TOTQの①TOT生起時の感情性については、「非常に不快である」から「非常に快い」までの7段階の評定反応に対して、順に1~7の得点が与えられた。同じく②目標語の検索成功性、③TOT生起時の目標語の部分的アクセス可能性、④妨害語の忘却困難性については、「まったくしない」から「非常によくある」までの5段階の評定反応に対して、順に0~4の得点が与えられた。同じく⑤目標語の検索努力については、「全く努力しない」から「非常に努力する」までの7段階の評定反応に対して、順に0~6の得点が与えられた。同じく⑥目標語検索への固執については、「全く気にならない」から「非常に気になる」までの7段階の評定反応に対して、順に0~6の得点が与えられた。同じく⑦目標語の検索断念については、「すぐにあきらめる」から「10分以上考えたあとあきらめる」までの5段階の評定反応に対して、順に1~5の得点が与えられた。⑧TOTの解決手段、⑨TOTの偶発的解消については、「まったくしない」から「非常によくある」までの5段階の評定反応に対して、順に0~4の得点が与えられた。ZTPIについては、「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの5段階の評定反応に対して、順に1~5の得点が与えられた。

記憶検査では、専用の記録用紙(日本文化科学社, 2001)に下位検査ごとの反応を記録し、検査マニュアルに従って粗点が算出された。下位検査ごとの粗点は所定の重みづけがなされ、それらの重みづけられた粗点をいくつか組み合わせることで合成得点を算出した。その合成得点から、年齢群別の指標得点への換算表に基づいて①一般的記憶、②言語性記憶、③視覚性記憶、④注意/集中度、⑤遅延再生という五つの指標得点が算出された。

①一般的記憶の指標得点は、②言語性記憶と③視覚性記憶の各合成得点を加算した得点に基づいて算出された。②言語性記憶は「4. 論理的記憶I」と「6. 言語性対連合I」の二つの下位検査の粗点に、③視覚性記憶は「3. 図形の記憶」、「5. 視覚性対連合I」、「7. 視覚性再生I」の三つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。④注意/集中度は、「2. 精神統制」、「8. 数唱」、「9. 視覚性記憶範囲」の三つの下位検査の粗点をもとに合

成得点が算出された。⑤遅延再生では、「10. 論理的記憶Ⅱ」、「11. 視覚性対連合Ⅱ」、「12. 言語性対連合Ⅱ」、「13. 視覚性再生Ⅱ」の四つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。

(11)倫理的配慮 本研究は、2010年12月に研究代表者の所属する神戸学院大学のヒトを対象とする研究等倫理委員会の承認を受けた。すべての実験・調査・検査の参加協力者に対して、実験・調査・検査の参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究代表者との間で取り交わした。具体的には、署名入りの同一の同意書を2通作成し、双方が1通ずつ保管するという手続きを取った。

4. 研究成果

(1)自由再生課題の実験結果 ①直後再生成績・最終再生成績・最終再生成績予測：試行ごとに直後再生テストと最終再生テストにおいて実際に何項目再生されたかの再生項目数、及び直後再生テストのあとに後続の最終再生において何項目の再生が可能であるかの予測再生数を試行の関数として表したものを図1に示す。直後再生成績と最終再生予測はともに試行が経過するに従って漸減の傾向が見られるのに対して、最終再生成績は試行の経過に従って着実に増加していく傾向が見られた。②下位リハーサル方略の使用頻度：記憶実験の終了後に実験参加者にどのような記憶活動を行ったかについて、それぞれの下位リハーサル方略に対する使用頻度に関する評定反応を得点化し、その平均を算出したところ、全体として、イメージ化やリスト内連想などの精緻化リハーサルに関連した下位方略の使用頻度が相対的に高く、それらに次いで単一反復や多重反復などの機械的反復リハーサルの使用頻度が高かった。それら以外は、総じて使用頻度尺度の中間点(2.0)よりも頻度評定値が低かった。

(2)メタ記憶質問紙及び時間的展望質問紙の調査結果 ①EMQの結果：評定得点の全体平均は3.08(標準偏差2.214)であった。EMQ

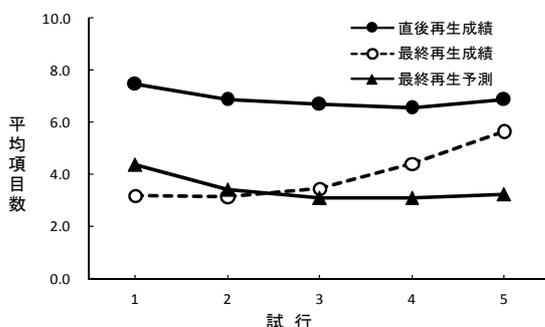


図1 再生試行の関数としての直後再生成績と最終再生成績と最終再生予測

に記載されている日常生活場面での特定の記憶行動や記憶現象に対して、平均して「最近6カ月に1回以上、月に1回以下」の頻度で経験したという反応が得られた。②CFQの結果：評定得点の全体平均は1.94(標準偏差1.173)であった。CFQに記載されている日常生活場面での特定の認知的失敗については平均して「過去6ヶ月の間で、ときどきある」といった程度の頻度で経験されていることが示された。③MAQの結果：評定得点の全体平均は3.04(標準偏差1.305)であった。MAQの日常生活場面での個人の記憶能力を表す記述文に対して、平均して「どちらでもない」にもっとも近い適合度を示す反応が得られた。④MIAの結果：評定得点の全体平均は2.62(標準偏差1.202)であった。⑤TOTQの結果：TOTQのほとんどの質問項目において評定反応は正規分布に近いパターンが示された。⑥ZTPIの結果：ZTPIの質問項目における評定得点の全体平均は3.30(標準偏差1.225)であった。

(3)記憶検査の結果 WMS-Rの下位検査の結果をもとに①一般的記憶、②言語性記憶、③視覚性記憶、④注意/集中力、⑤遅延再生という五つの指標得点が算出された。その結果、本研究の検査成績はほぼ、標準データとの間に有意差は認められず、五つの指標得点についてはいずれも度数分布にさほど大きな偏りは見られなかった。

(4)実験室場面と日常生活場面でのメタ記憶の関連性 記憶実験における最終再生成績と最終再生予測の差に注目し、最終再生テストで実際に再生された項目数から予測された項目数を減じた値(「最終再生成績-最終再生予測」)を算出し、EMQ、CFQ、MAQ、MIA、ZTPIの各因子別平均評定値、記憶検査における五つの指標得点との相関が求められた(表1)。これらの分析結果から、主として、最終再生予測は再生試行の経過に従って過大予測から過小予測へと変化すること、実験室場面での最終再生成績の予測に反映される記憶モニタリングの正確度とメタ記憶質問紙への評定に基づく日常生活場面での記憶の自己評価とはさほど関連していないことが示された。さらに、実験室場面での自己の記憶成績を相対的に過大に予測したり、ほぼ適正に予測したりする者よりもむしろ過小に予測する者ほど、記憶検査の結果では言語性記憶や視覚性記憶、遅延再生にすぐれてしていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

①Shimizu, H., Anderson, D., & Takahashi,

表1 記憶実験での「最終再生成績－最終再生予測」と他の指標との関連性

【メタ記憶質問紙・記憶検査】 因子・指標	「成績－ 予測」との 相関
【日常記憶質問紙(EMQ)】	
検索	.039
活動の記憶	.048
課題モニタリング	-.008
会話モニタリング	.109
空間記憶	.045
【認知的失敗質問紙(CFQ)】	
空間的失敗	.203 *
うっかり、ぼんやりの失敗	.004
検索失敗	.076
約束の失敗	.072
人名記憶の失敗	.119
【記憶能力質問紙(MAQ)】	
もの忘れ、無意図的忘却、回想・ 未来(展望)記憶想起の失敗	.146
頭から離れない記憶、回想的想 起、無意図的想起	-.044
検索困難、意図的想起の失敗経 験	-.002
人名の想起困難	.106
【成人メタ記憶尺度(MIA)】	
変化	-.065
課題	.072
能力	.052
不安	.160 +
方略	.128
支配	.123
【ジンバルド一時的展望質問紙(ZTPI)】	
過去否定	-.023
未来	-.124
過去肯定	.017
現在快樂	-.110
現在運命	.021
【ウエクスラー記憶検査(WMS-R)】	
一般的記憶	.424 ***
言語性記憶	.394 ***
視覚性記憶	.302 **
注意／集中力	.148
遅延再生	.508 ***

+ .05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

M. Autobiographical memories of specific social events for older and younger adults: Context dependency of the Memory Characteristics Questionnaire on recollection of 1970 and 2005 Japan World Expositions. *Japanese Psychological Research*, 査読有, Vol.54, No.2, 2012, 182-194.
DOI:10.1111/j.1468-5884.2011.00482.x

②Anderson, D., & Shimizu, H. Memory characteristics in relation to age and community identity: The influence of rehearsal on visitors' recollections of the 2005 Aichi World Exposition, Japan. *Visitor Studies*, 査読有, Vol.15, No.2,

2012, 186-202.

DOI:10.1080/10645578.2012.715026

③清水寛之・高橋雅延・齊藤 智、日常記憶の自己評価に関する交差文化的研究－日常記憶質問紙(EMQ)の回答における日本の大学生とニュージーランドの大学生との予備的比較検討－、人文学部紀要(神戸学院大学人文学部)、査読無、第31号、2011、171-186.

[学会発表](計3件)

- ①Shimizu, H. Study on the tip-of-the-tongue phenomenon in everyday life using a questionnaire. The 10th Tsukuba International Conference on Memory (TIC10)、2012年3月5日、学習院大学
- ②清水寛之、日常生活における「喉まで出かかっているのに出てこない(tip of the tongue, TOT)」現象に関する調査研究II 日本心理学会第75回大会、2011年9月17日、日本大学
- ③清水寛之、日常生活における「喉まで出かかっているのに出てこない(tip of the tongue, TOT)」現象に関する調査研究I 日本心理学会第74回大会、2012年9月22日、大阪大学

[図書](計4件)

- ①大山 正(監修)、箱田裕司(編著)、誠信書房、心理学研究法2 認知、2012、238。(清水寛之(分担執筆)、第2章 記憶、pp.47-96)
- ②太田信夫・巖島行雄(編著)、北大路書房、現代の認知心理学2 記憶と日常、2011、339。(清水寛之(分担執筆)、第11章 記憶の生涯発達、pp.266-300)
- ③日本発達心理学会(編)、子安増生・白井利明(責任編集)、新曜社、発達科学ハンドブック 3 時間と人間、2011、324。(清水寛之(分担執筆)、第17章 自伝的記憶の発達、pp.274-292)
- ④ダンロスキー, J. & メトカルフェ, J. (湯川良三・金城 光・清水寛之(共訳)、北大路書房、メタ認知の基礎と応用、2010、315。(pp.55-84, 85-113, 162-191)

[その他](計1件)

①清水寛之、平成22～24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(課題番号22530803)、メタ記憶の観点に基づく記憶モニタリングの正確性と記憶コントロールの効果性の評価、2013、101.

6. 研究組織

(1)研究代表者

清水 寛之 (SHIMIZU HIROYUKI)
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：30202112